

思想

社会思想

カオスのなかで

1980年代後半以降の社会思想の動きを比喩的に言うならば、ゴルバチョフの改革によってもたらされた思想上の小さな揺らぎが急激に増幅していった結果、一種のカオス状態が生まれてしまったと表現できるかもしれない。

このカオスのなかで、以前の熱狂やアパシーから醒めて冷静に社会的合意を形成するための着実な方法を探ろうとする人々や、逆にこの一見カオスに見える状態のなかに依然として変わることのない文化の型や構造を見てとり、それらのさらなる解体をめざしている人々もいる。

この思想的カオス状態にいたる流れのなかで生まれたいくつかの傾向をさしあたり以下のようにまとめてみることができるだろう。

さまざまな思想運動グループ

第1に、政治思想上の複数の流れがある。それは、ソ連共産党の公式イデオロギーであった「哲学的、経済的、社会＝政治的見解の全一的な整然とした体系としてのマルクス＝レーニン主義」（党綱領）の見直しの動きから始まり、

その段階的な批判から全否定への大きな流れとともに、それらへの極端な反発がある。

西欧的な民主主義的な社会主義や修正型の資本主義をめざす流れ、ソビエトの伝統を重視する共産主義者や大国主義的で反西欧的な愛国主義者や民族主義者、あるいは急進的な民主主義者、新自由主義者とともに少数の労働組合主義者、エコロジスト、さらには反政治的な文化運動などさまざまな思想運動グループが登場した。

これらは、80年代前半に、主として文学の分野で育まれたさまざまな思想的な萌芽が開花したものとして見ることもできるし、90年代前半の急激な体制転換の結果生じた、大多数の住民の物質的・精神的な生活条件の危機への反作用として理解することもできる。

「ロシア的理念」の行方

第2に、支配的イデオロギーの消滅にもなつて生じた、人々の精神的・心理的な空虚感を穴埋めするかのようになつてきたのが、集団的あるいは個人のアイデンティティを確立させてくれるような全一的で体系的な世界観への関心である。

最も大きな流れは、ロシア独特の宗教色の濃い哲学的思想の伝統への回帰志向である。とりわけ90年代前半に最も頻繁に語られたのが「ロシア的理念」という考え方である。それは西欧哲学とは根本的に異なつたロシア独自の世界理解を積極的に打ち出していこうとする立場であり、19世紀前半の「スラヴ主義」の流れを汲み、19世紀末の哲学者ソロヴィヨフによって大きな意味が与えられ、20年代にソビエト政権によって国外へ追放されたベルジャーエフ、イリイーン、カルサーヴィン、フェードトフらの宗教哲学者によってさまざまに解釈されたものである。

このような「ロシア的理念」に代表される哲学的伝統のなかに、ソビエト時代を生きた文学理論家バフチーンや革命前の「銀の時代」（プーシキンの「金の時代」）に匹敵する20世紀初頭のロシア精神文化の昂揚期）の哲学的伝統の継承者といわれる美学史家ローセフ（1893～1988年）を位置づけ、ソ連崩壊以降の現在にいたるまでの伝統の継続性を主張する人々もいる。しかし、他方で、この伝統は65年に生涯を終えた最後の亡命思想家たち（ロースキーら）とともに死滅し、それとは断絶したかたちで56年以降の「雪どけ」時代に国内でまったく新しいロシア＝ソビエト思想の伝統が始まると主張する人もおり、激しい論争になっている（マラーホフ論文「ロゴス」No8、1996年）。

また、20年代の亡命思想家たちによって展開された「ユーラシア主義」も注目された。それは、自然＝地理的要因を重視しつつヨーロッパとアジアの中間に位置する

多民族空間としてのロシアの独自性を強調する地政学的思想である。いずれも従来の社会関係の急激な崩壊のなかで「我々」という集合的自己意識をどう再構築するのかという政治思想的課題と結びついている。

また、ソビエト時代に独創的な生態学的な「激情の理論」にもとづき、さまざまな種族集団（エトノス）の壮大な自然史を描いたグミリョフ（1912～92年）や宇宙（コスモス）論的な視野での人間-自然界を総合した世界観を構想した自然科学者ヴェルナツキー（1863～1945年）らの著作も人気を博している。

心の世界に対する関心

ロシア中心主義的な発想とは趣を異にし、また西欧近代の合理主義的な思想とは異質な発想への関心も生まれている。たとえば、オカルティズムの流れ、「神智学」の創始者ブラヴァツキー夫人やシュタイナーの思想への注目や、仏教、禅、道教、儒教、イスラム神秘主義などのいわゆる「東洋思想」への関心も高まっている。

96年には、オウム真理教や統一協会など外国起源のカルト集団を取り上げた「ポスト共産主義ロシアの“非伝統宗教”」と題する討論会も開催された。彼らのトランスナショナルな性格、共同体的生活スタイルや社会-宗教的ユートピア性、心理操作の技法などの問題が議論された。既存の家族-人間関係の崩壊と個々人の内面世界の空洞化のなかで、カルト集団のみならずサイコセラピーやサイエントロジーの流行に見られるような、人々の心の世界をめぐる諸問

題に関心が向けられている。

「雪どけ」期以後の思想家の影響

第3に、スターリン死後の「雪どけ」期以降にソ連国内で活躍した思想家たちの影響を受けた流れがある。かつて政府によって弾圧された「異論派」と呼ばれた人々、とりわけ人権擁護を訴えたサハロフ、共産主義の民主主義的改造を志向したメドヴェージェフ、正教信仰を重視したソルジェニーツィンらの思想的影響力は今日でも衰えていない。またシャファレーヴィチ、ペロフ、ラスプーチンらは愛国主義者として発言しており、共産主義の刷新を図るコソラーフなどが現在も活躍している。

また記号論の分野ではロートマン（1922～93年）らのモスクワタルトゥ学派の流れ、哲学の分野では、体系構築型の哲学を拒否し、あらゆる人間活動の時空間における自由な意識の出来事=現象として思想を表現したマルダシヴィリ（1930～90年）らの直接の影響を受けた、新しい世代の思想家たちが現在活躍し始めている。

さらに、近代の認識理性の危機に直面して非合理主義に向かうのではなく、新しい、より全般的な理性としての対話的理性を唱えているビブレル（1918年生）は、ロシア人文大学を拠点に教え子のアフチンらとともに「文化の対話」学派を形成し現在も積極的に著作活動を行っている。またローセフの影響を受けたアヴェリンツェフ（1937年生）も「文化学」の領域で独創的な研究を行っている。

欧米思想の受容

第4に、近現代の欧米の思想を

積極的ないし批判的に摂取し、それとの対話を行おうとする潮流がある。その主要な担い手は「雪どけ」期にマルクスから始めカント、ヘーゲル、フッサールの著作を通して意識や認識の方法論の問題に関心をもった世代の教師のもとで教育を受け、70年代以降にヴァイトゲンシュタインやハイデガールの著作を読み、「ブルジョワ科学」批判の名目で実存主義、現象学、フランクフルト学派、構造主義人類学などを研究した世代である。

「70年代人」の一人、モルチャノフ（1948年生）は、今日ロシアでの現象学・解釈学の流れを代表する思想家で「ロシア現象学協会」とその雑誌「ロゴス」などでロシアの現象学者シバート（1879～1938?年）の発掘やフッサール著作集の刊行に取り組んでいる。

また「余白の哲学」を標榜しているポドロガ（1946年生）は、ニーチェ、ハイデガー、アドルノなどから思想的素材を汲み取りつつ、古典的哲学に対置される周縁的（マージナル）な領域に関心を寄せ、ロシア文化史における身体性や感受性の分析をめざしている。

同様にルィクリン（1948年生）はレヴィ=ストロースの研究から始め、90年代初頭にドゥルーズ、ガダリイの著作を紹介し、フランス留学を経て、ロシア・ソビエト文化における視覚的次元の音声-言語的次元への従属性といった問題を論じている。彼らは伝統的なロシア哲学の流れとは別の立場から、欧米とは異なるロシア・ソビエト文化の一面を批判的に明らかにしようとしているようである。

これらと重複するもう一つの流れは、95年に創刊されたモスクワ

精神分析協会の雑誌「原型」である。フロイトやユングの著作を紹介したり、ロシア思想史に伝統的な「西欧-ロシア」の関係を、「無意識」のレベルに掘り下げて分析しようとするグロイスや、精神分裂症分析の手法を独創的に用い「身体の記号論」を構想するジモヴェツの論文やポドロガのエイゼンシュテイン論「父への反逆」を掲載している。

政治哲学の再考

96年の特徴的な動向を概観してみると、総じて価値観や認識の問題から実践の問題へと社会思想の重心が移行しつつあるように見える。これは実効力ある権力をどう再構築するのかというアクチュアルな課題と結びつき、政治哲学の再考として現れている。「哲学の諸問題」誌には10数本のデモクラシー論が掲載された。政治がイデオロギーや精神的な価値体系に全面的に従属するのではなく、またそれに対する反発としての全般的脱イデオロギー化や「政治は汚い」といった気分に限るのではなく、個別具体的な問題に対するプラグマティックな解決法を求めると志向が生まれ始めている。

同時に、体制が転換したことによって改めて知識人たちの意識に浮上してきたのが、共同体・家父長制的家族・専制権力といった制度を支えてきた人々の、集団主義的意識の歴史的伝統の根深さであった。この歴史的伝統を前提にしつつも、欧米の「市民社会」で機能しているような対話的なコミュニケーションのための理性を、どのように政治と教育の場で形成していくのかという課題が強く意識

され始めている。ポスト共産主義社会におけるデモクラシーは、欧米の模倣でもなく、ロシア的「独自性」への安住でもなく、新たに自力で構築されるべきものであると力説するパンチンの論文（『哲学の諸問題』）はその一例である。

21世紀を展望した思索の開始

思想史の分野では、19世紀後半に哲学・心理学・社会学の分野で活躍したロシア実証主義の潮流への注目が目立った。西欧でのブルジョワ社会の漸進的進化を理想とし、「存在-意識」という古典的な哲学の根本問題よりも、経験的に獲得された個別の実証諸科学の知識を重視する流れである。

欧米思想の受容の傾向としては、ユングとフーコーの翻訳書とともに英米語圏の思想家の受容が著しく目立った。「哲学の諸問題」誌にはA.マッキンタイアへのインタビューが掲載された。前年までに盛んに紹介されたロールズらとともに、自由主義の価値相対主義の流れに抗して、共同の善や正義を説く「コミュニタリアン」と呼ばれる思想家である。彼はマルクスの「フォイエルバッハ・テーゼ」での「実践」の意義を強調し、ソ連のマルクス主義哲学者イリエンコフ（1924-79年）の仕事を評価し、世界市場と国民国家の支配に対抗するために、合意可能な共同の善・徳を実現する場としてのローカルで小規模なさまざまなコミュニティを創設・普及・擁護するという実践的課題を提起している。

また、アメリカのジェームズ、バース、デューイらのプラグマティズムへの関心も高まっている。

『哲学の諸問題』誌にはバースの翻訳が、「ロゴス」誌には20年代のプラグマティズムの伝統を重視するR.ローティの論文とインタビューが掲載された。公共的なものと私的なものはいかに統一されるかというリクリンの質問に対し、彼は統一される必要はないと答え、ハーバーマスとデリダを対置することなく重視し、生の意味と道徳的アイデンティティは他者との関係のなかで獲られる連帯性のことであると語っている。

ロシアで最も影響力ある作家の一人、リハチョーフ（1906年生）が主宰する文集「前夜」が創刊され、欧米とロシアでの記号論や身体の哲学の潮流を念頭におきながら、21世紀を展望した論文が掲載されている。第1冊「ロシア的ユートピア」では、ロシアにおけるヨーロッパ的文化水準の再建という課題が掲げられ、第2冊「文化における両極性」では新しいシステムはカオスを介して誕生するものであると論じられている。

最後に思想をめぐる環境の激変も指摘しておく必要がある。根源的な問題として、生活の窮乏化に加え、テロリズムや組織暴力、生態学的環境の危機など、人々の「死の不安」の高まり、またマス・メディアによる情報の氾濫や大衆心理操作、社会規範の喪失など「主体性」の危機といったポスト工業化社会に共通する問題も生まれている。これらの新たに生じた現実と直面して、社会批判の武器であり、生の意味・目的の探求としての社会思想に課せられた課題は、ますます大きなものになっているといえる。

（下里俊行）